

巻頭インタビュー

元氣

の源

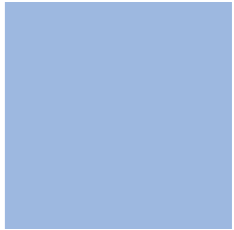
を聞いてみました

気象予報士・防災士

木原実

さん





事。俳優業が基礎にあつてこそ踏み出せたメディアでの第一歩でした。

もともと演劇をやつていまして、大学卒業後はアルバイトをしながら小劇場で芝居をしていました。そんなとき同僚が「もっと効率のいい仕事をしながら芝居をやる方がいい。俳優を目指すならナレーションのスキルは生きたるよ。きーちゃんならできる」と

声優の道を紹介してくれたんです。そして声優として活躍していた神谷明さんの付き人をしながら、声優のノウハウや心構えを教わりました。

そのうち朝番組のリポーターはどうかと声がかかったんです。メディアを通して何かを喋る、伝える基礎は演劇だと思ふんですよ。日本にラジオが流れ始める前はアナウンサーという職業は存在しませんでした。人前で喋ることで生計を立てていたのは役者や唄家たち。ラジオで一躍全国的に人気が出た喋り手の徳川夢声も活動弁士でした。僕の最初の仕事、リポーターは、構成作家が書いた原稿を自分自身の生きた言葉で伝える仕

事。俳優業が基礎にあつてこそ踏み出せたメディアでの第一歩でした。

次の仕事は日本テレビの天気キャスターでした。アメリカではニュース、スポーツに次いで天気キャスターが凄い人気だったと聞いています。僕が天気予報を伝え始めた86年頃は夕方ニュース戦争という言葉がありましたが、日本テレビでも他局を凌ぐ革新的な番組をつくろうと肝いりでスタートでした。気象予報士が国家資格になったのが95年ですから、当時の天気キャスターは皆資格無し。当然僕も天気専門知識がないままのスタートでしたから、当初2年間は日本気象協会に毎日通つて天気のイロハを教わりました。

天気予報も初なら生放送も初ですから、当初は本当に苦しかった。芝居仲間からの反応が酷くて、「きーちゃん、ガチガチで見られないよ。舞台では縦横無尽に客を湧かすのに、生放送ではどうしてあんなに緊張してんだって。大げさに言うと芝居は百回稽古しますから劇場で身についた演技ができるんです。でも天気予報は当日受けた原稿を決まった尺のなかで読まなきゃいけない。しかも相手は無機質なレンズなんです。お客さんがいない。カメラの前で真っ白になっていました。辛くて辛くて、本番

本質をとらえていれば、人に届く。
子供たちに分かる手法を、常に考えていきたい。

が終わると逃げたいから酒を飲むですよ。ひと月で5キロ痩せましたね。

そんな日々を克服できたのは、スタッフや仲間の「期待感」や街の人々の反響でした。反省会でスタッフが励ましてくれたり、街で「あつ、お天気の人ですか」って声をかけられたりするのが励みになって、一日一日少しずつ前進できてスタートラインに立つのに1か月かかったんです。VTRカメラで収録するリポーター時代は撮り直しや編集でこまかしてもらっていたのですが、ニュース番組は生で伝えることの厳しさを教えてくれました。

お天気コーナーのなかで「お子さん出演」が恒例になっていますが、実はこれは偶然できた企画です。日本テレビの屋外でリハーサルをしているとちよつど子供たちの帰宅時間が重なるんですね。彼らと話をしているうちに本番が始まり生放送中の画面に子供たちが映るようになって、皆面白がつて友達を呼んで次第に増

木原実さん

気象予報士・防災士

神奈川県出身。1986年から日本テレビでお天気キャスターを務める。現在は日本テレビ『news every.』で、キャラクターのそらジローと、お天気コーナーを担当。ナレーターや声優、舞台俳優としても活躍中。2004年には防災士としての資格を取得し、翌年には日本防災士会常任幹事に就任。2010年度の内閣府「災害被害を軽減する国民運動サポーター」に就任し、ジュニア防災検定(防災検定協会)理事も務める。

日本テレビ『news every.』(月～金 15:50～19:00)
<http://www.ntv.co.jp/every>

INFORMATION

『ぐらつとゆれたらどうする!?』
そらジロー&木原実 文・監修(小学館)
日本テレビ「news every.」等に登場する天気予報マスコットキャラクター・そらジローと、お天気キャスター・木原実による、子供のための防災絵本。地震、大雨、雷、台風、津波、大雪等の自然災害に対し、どのように準備、対処したらいいのか。そらジローの様々な疑問に対して、木原実が優しく丁寧に解説・アドバイスします。